

## てんどうだ てんどうだ 八郎瀧町 浦大町 天道田

### \*てんどうだ\*

天道信仰(天地を主宰する神への信仰)に関与する地名と思われる。

日本神道(日本民族の伝統的信仰で、祭祀を重んずる多神教の宗教=1996年 学研 漢字源)の中の

うらべト部神道の源流を迎れば、それは対馬神道で、ことのほか多い対馬、杵岐の式内社の社家もまた多

くはト部氏であった。しまないしや(式内社是对馬に29座、杵岐に24座あり)このト部氏は、古代豪族、対馬直、杵岐直の一族で、天神、雷神、海神などの祭りに仕え、対馬流の神務とも称した。その対馬神道の原点である天道縁起に、「ウツロ船に乗って漂着した女が、日光に感精して天童を産んだ」と伝え

られる。そして日輪をほら孕んだ女神像を御神体として日の神となり、太陽と不可欠の農耕文化に結びついて穀霊信仰と一体のものに発展したのである。

この天道祭祀さいしのある村々には、天道、嶽神(岳神)、雷神がセットになって配祀されている例が多いという。(中略) この天道信仰はいうまでもなく対馬暖流を通じて北上したとも考えられ、内陸地ではその流布とともに穀神として山岳上まつに祀られたのであろう。

1988年 ぬめひろし著 はなし地名譚

### \*てんどうだ\*

天道田地名は浦大町にあり、副川神社に藩領を安堵され、その寄進米の田地に天道田という名がついたものか。天道とは天地を主宰する神、太陽・日輪・天道神とある(広辞苑)。副川神社祭神は

「天照大御神・豊受大神・すきのうのみこと須佐男命」(八郎瀧町史)にあり、そのようなことから天道田地名はつけられてむべなるかなである。

「地名と歴史3」ふるさと散歩107八郎瀧町広報  
島山四郎

### \*戸村堰\*

五城目町田町付近から馬場目川の水を取り込み、面瀧地区に引いた灌漑用水。近世になって新田開発にともなう用水路(堰)や沼、田の地名は、開発した人名が冠せられる場合が多く、佐竹氏の秋田転

封にともなって最初に水田をすすめた「さしがみ差紙開き」の地名は、ほとんど差紙を下付された人の名が付いている。代表的な物は南秋田郡八郎瀧町を流れる馬場目川の取水口から発する「戸村堰」で、戸村十太夫の開発によるものである。慶長10年(1605)から慶安元年(1648)までに開墾が終わり、享保14年(1729)の石高では野田、一日市、夜叉袋、小池、浦大町を合わせて445石2斗5升8合という検地帳の面積となっている。

1988年 ぬめひろし著 はなし「地名譚」

### \*戸村堰\*

五城目富津内から八郎瀧夜叉袋まで6km。戸村十太夫が慶長10年(1605)から慶長12年(1607)まで開発。六ヶ所御堰、又は六ヶ所村堰ともいう。戸村の名字から戸村堰という。

秋田の地名研究会 渡部景俊

### \*とむらぜき\*戸村堰

〈五城目町・八郎瀧町〉

南秋田郡五城目町から八郎瀧町面瀧地区にわたる用水路。取水口は馬場目川と富津内川の合流点(五城目町石田六ヶ村堤沿)で、面瀧地区夜叉袋の弁天沼に至る。長さ6km。受益面積は馬場目川右岸(湖東平野北部)の旧面瀧村473ha。

当地域は馬場目川が形成した氾濫原とカスプ型三角洲からなり、低湿地で水利が悪く、少し日照りが続くと干魃、長雨には一面水底に沈むという有様であった。慶長9年中川宮内が指紙(開発許可書)を下付され、湖東12か村を開発するため用水路開削に着手したが失敗、その後戸村十太夫(佐竹家家老)が夜叉袋の肝煎村井長右衛門の願いを入れて用水路建設にとりかかり、慶安元年開墾事業を完成させた(地理学評論37-1)。なお、補助水源として富津内川上流に大由沢溜池が

## とむらぜき とむらぜき 戸村堰